

あの時。今、そしてこれから

天田 真弓

* 今の世界情勢や日本の現状を考えると、この原稿を掲載していただく事に躊躇もありました。読んで下さる皆さんの気持ちをますます暗くしてしまうのではないかと。でもまた、あの事件を通して新しく生まれ変わろうとしているツイン・シティに少しでも希望を感じていただけるのではないかとも思います。しばらくお付き合いいただければ幸いです。

私が初めてミネアポリスに来た時に抱いた印象はとても素晴らしいものでした。皆さんもきっと私と同じように感じた事でしょう。大きくゆるやかに流れるミシシッピ川、緑に囲まれた湖の数々、そしてとてつもなく美しい青空と光の夏。人々は自然にも文化にも恵まれたこの地での生活を心から楽しんでいました。

しかし、平和で美しくモダンな都市だったミネアポリスはちょっと様子の違った一時期を過ごしました。皆さんもご存知かと思いますが、今から2年前に起こったジョージ・フロイド氏の事件。そして引き続き発生した大規模な暴動。レイク・ストリート沿いやミッド・タウン周辺は想像を絶する破壊行為に合い、さらには放火されて多くの建物が焼け落ちました。また多数の商店が略奪に合い、テレビ・スマートフォン・食料品・衣類等、ありとあらゆる商品が持ち去られました。破壊、放火、略奪。ニュースで繰り返し流された一連の光景が現実にはツイン・シティの中で起こっている。信じがたい事でした。その翌日、暴徒がダウンタウンへ侵入するという憶測が流れ、それを阻止するために数々の装甲車や銃を持った州兵がワシントン・アベニューに並びました。自分のアパートの目の前で展開された異様な光景。戦争が始まるのかと錯覚しそうな物々しさは衝撃的でした。幸いにもダウンタウンは大きな被害は免れましたが、経験した事のない出来事の数々は恐ろしいの一言でした。

これらの動きには、今までもあったけれど容易には解決されず、あるいは隠れてしまっ
てよく見えなかった問題が突如として一気に噴きあがった感がありました。ミネアポリスの警察組織が持つ人種差別的な体質に大きな非難の目が向けられ、警察解体論まで飛び出した程です。ジョージ・フロイド氏の名前を連呼しながらの市民の抗議活動も何度も繰り返され、人種差別への糾弾や人種間の不平等撤廃、現状変革の声などが混ざり合って、得体の知れないエネルギーが街中を覆っていました。

この事件の前にはコロナ肺炎が広がり始め、私たちは目に見えないウィルスの影に怯えていました。一時外出が制限され、ダウンタウンは「不気味」という表現がぴったりな程人の気配が無くなって、ゴーストタウンのようでした。リモートワークへの移行でオフィスの人影も無くなり、客足が途絶えたレストランや商店は次々に休業、あるいは閉店しました。先行きがはっきりしない不安。閉塞感やストレス。そのあとにやって来た孤独と失業の追い打ち。いつ晴れるかもしれない暗く重たい空気が街を覆っていました。このタイミングで発生したジョージ・フロイド氏の事件にツイン・シティは強烈なダブルパンチをくらったかのようでした。

その後、事件の裁判が連日生中継され、生々しい当時の様子が多く証言されました。ニュースではこれでもかという程事件のビデオが流され、市民の心の傷を大きくしました。判決の結果によっては暴動が再発する恐れもあり、州庁舎・市庁舎を始め警察署・郵便局などの公共の建物は長期にわたりボードやフェンスで囲まれ、鉄条網が鋭いトゲを光らせていました。入口がどこにあるかわからなくなってしまった建物は、来るかもしれないその時に備えて固く身構えているようでした。

不安を抱えてじっと耐えている状況の中、去年は殺人事件が多発しました。犯罪やギャングの抗争、さらに車を運転しながらのランダム・シューティング。流れ弾に当たった幼い子供も何人か犠牲になりました。感覚が麻痺してしまい、連日の殺人事件の報道も耳を素通りしていくようでした。安全とはとても言えない状況がしばらく続き、街の中を歩いていても常に不安な気持ちに襲われたものです。

すっかり元気をなくしてしまったミネアポリス。平和で美しい私の大好きな都市は、はたして息を吹き返せるのか？ 一時そんな不安が頭をよぎりました。現在状況は落ちつき、コロナ肺炎の消失もあって街の中には活気が戻ってきています。暴動の被害を受けた地域には、土台だけになってしまった建物の跡や整地され空き地になった場所、壊されたまま使用されていない店舗跡もまだ見受けられますが、苦難を乗り越え営業を再開した商店も多く、瓦礫の跡地には新しいアパートなども建てられています。

ミネアポリスには底知れぬ市民の力があり、エネルギーがあります。完全な復興にはもう少し時間が必要かもしれませんが、ここに住む人々の知恵と行動力できっと以前のようすばらしいミネアポリスが戻ってくると信じます。ミシシッピ川は変わらず流れ、季節は同じように巡ります。もうすぐクラブアップルの花も満開となり、私たちの心と目を楽しませてくれる事でしょう。ミネアポリスがまた花開き、さらに輝きを増して戻って来る日まで、皆さんとともにその過程を見守って行けたらと思います。その日はもうそこまで来ているようにも感じます。

記憶というものは薄れ去っていくものですね。事件当時書き残した生々しいメモを読み返してみて、2年前のジョージ・フロイド氏の事件も時間とともにその詳細があやふやになっていると感じました、

事件直後に現場に行って写真を撮りました。その中のいくつかを皆さんとシェアさせていただけたらと思います。もう一度自分が肌で感じた事を振り返り、皆さんにも事件を思い起こしていただけたら幸いです。最後に大急ぎで撮った最近の写真もいくつか掲載させていただきました。何か新しい息吹を感じていただけたらと思います。



「花束の山」

2020年5月25日(金) アメリカの歴史に残る大きな事件がミネアポリスで発生しました。警察官によるアフリカ系アメリカ人の殺害事件です。偽札を使ったという疑いで拘束されたジョージ・フロイド氏が、手錠をかけられた上に8分46秒もの間、警察官の膝で道路に首を押しえつけられ「息ができない」と訴えながら亡くなりました。46歳でした。長い間アメリカ社会にはびこってきた人種差別の問題が大きく関係したと言われる事件でした。

直後にその現場に行ってきました。花束の山でした。道路上に青くかたどられているのは彼が亡くなった場所です。その場にいただけで知らずに涙が出ました。とても悲しく、あってはならない事件でしたが、多くの人が抗議の声を上げ、強い思いでこの根深い問題に立ち向かおうとしている姿は、希望であると感じました。

この場所は、ジョージ・フロイド・スクエア という名前で整備される予定で、数年後の完成を目指して現在その計画が進められています。



「声なき人々」

事件が起こったのはサウス・ミネアポリス。交差点近くの店舗前でした。直後にその通りは閉鎖され、彼の死を悼むため、また事件の証言者となるために多くの人たちが訪れました。近くの道路には、これまでに警察官に殺された数多くのアフリカ系アメリカ人の人たちの名前が書かれていました。その数に圧倒されましたがこれが全員という訳ではなく、もっともっと多くの方が今回のような理不尽な事件で命を落としています。声を出せない人々の無念さ。名前だけになってしまった彼らの悲しみが、より強く心に響きました。

この事件から3週間も経たないうちに、同じような事件がジョージア州で起こりました。車の中で寝ていた若いアフリカ系アメリカ人男性が、ドラッグの取り締まりをしていた警察官に射殺されてしまったのです。奴隷制度に始まるアフリカ系アメリカ人への差別や偏見は、暗く、大きく、そして重く、アメリカの歴史の根底に横たわっていると感じました。



「傷跡」

この事件をきっかけに、ツイン・シティで大きな暴動が起きました。当時のニュースによればミネアポリスとセントポール、合わせて、250以上の建物に火がつけられ、そこに入る700以上の商店が焼かれ、数え切れないショー・ウィンドーが壊されて商品が略奪されました。個人経営のお店ばかりでなく、大規模な倉庫・スーパー・レストラン・郵便局・図書館、そして銀行までもが放火の被害に合いました。レイク・ストリート沿いのミッド・タウンでは、商店が軒並み甚大な被害を受けました。焼けて崩れた建物の数々にやり場のない虚しさを覚えました。



「怒りと悲しみ」

暴動の被害が最もひどかった地域のひとつ、レイク・ストリートとミネハハ・アベニューの角にあったリカーショップです。放火され、一階の床は全て焼け落ちて、商品の缶ビールが地下に散乱しているのが見えます。暴動から3週間以上経っていても、焼けた建物の匂いが立ち込めていました。このお店は被害を受けた建物の、単に「250分の1」に過ぎません。「必ず戻って来る」。焼け跡に掲げられた力を振り絞るような文字に、かすかな光を感じました。現在この場所は整地され、草の生えた空き地になっています。



いのち

「生命の力 言葉の力」

暴動により市内のいたるところが大きく破壊され、市民の心は深く傷つきました。しかしガラスの破片は多くのボランティアによって直ちに綺麗に片付けられ、枠だけになったショー・ウィンドーを覆うボードには美しい絵が描かれました。そこに、人々の希望と大きなエネルギーを感じました。この写真は大規模な被害を受けた地域、アップ・タウンに描かれた数多くの絵の中の一つです。コンクリートを打ち破り、大きな花が咲く。力強いメッセージを感じました。

アフリカ系アメリカ人の公民権運動指導者、マーティン・ルーサー・キング牧師の言葉はこの絵以外にもたくさん書かれていました。力強く明快で、何年経とうが色褪せない言葉の数々に心を打たれました。

雨が降った事もあり、ここを訪れた日、アップタウンは人影もまばらで閑散としていました。





「星になった」

ファースト・アベニューの建物の外壁には、多くの出演ミュージシャンの名前が星にかたどられ書かれています。その中にはもちろん、プリンスの名前もありますが、彼が亡くなった後、その星には金箔が施され、彼の名前は一層輝きを増しました。

ジョージ・フロイド氏の事件の後、その壁には彼の名前が追加されていました。赤いバック・グラウンドがひととき目立ちます。彼の命へのリスペクトや、あの出来事を忘れず現状を変えて行こうとする市民の気持ちを代弁しているように思えました。



「3rd Avenue Bridge 補修工事」

ダウンタウンからセントラル・アベニューに通じる 3rd Avenue Bridge。昨年1月に1年以上かけての補修工事が始まり、この11月には再開通する予定です。1918年に完成したというこの橋ですが、橋脚や橋本体のコンクリートがボロボロと崩れ始めている所がありました。工事の終わりが新生ミネアポリスの始まりとなるような事業です。



「早春のストーン・ブリッジ」

一時閉鎖されていたガスリー・シアターも再オープンしました。 エンドレス・ブリッジからストーン・アーチ・ブリッジを見たのは本当に久しぶりでした。 この3月下旬から4月にかけては雪の次に雨また雨。 肌寒い日々が続き春がなかなかやって来ませんでした。 その雨を吸い上げ、青葉の季節がもうすぐやってきます。



「セントポール ファーマーズ・マーケット」

5月8日(日)、セントポールのファーマーズ・マーケットに行ってきました。まだお店も人も多くありませんでしたが、新鮮な野菜や草花の苗などが充分目を楽しませてくれました。